

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院学生研究**  
**2021年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	英米文学 専攻
<b>研究代表者</b> (2022年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		有馬 三冬
<b>指導教員</b>	所属部局・職名		氏名
	文学部・准教授		古井 義昭
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
<b>研究課題</b>	Edgar Allan Poe 作品における作者の権威性と 19 世紀アメリカの著作権		
<b>研究組織</b> (研究代表者 ・ 共同研究者) ※2022年3月現 在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名
	文学研究科 英米文学専攻 博士課程後期課程 1年		有馬三冬
<b>研究期間</b>	2021 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 191,646 円 / (採択金額) 200,000 円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、Edgar Allan Poe の中編小説 *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* をメインテキストとして取り上げ、Poe 作品における語りの権威をメタフィクショナルな観点から再考し、著作権の不確かな当時の出版状況と呼応することを明らかにするものである。本研究では中心的権威を排除していく物語内の力学と主人公 Pym が語り手として中心化していく力学を指摘し、市場で文学作品が流通する中で作者個人の特権性が解体され分散していく過程と、反対に作者が著作権を主張して個人の特権性を顕示する過程として解釈した。さらに、特権的な語り手／作者となる Pym もまた最終的に排除されることから、本作品が創作論で示される権威的作者像とは異なる、新たな Poe の作者像を提示していることを明らかにした。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 19世紀文学市場 } { 著作権 } { 流動性 }

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、Edgar Allan Poe の中編小説 *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* (1837) における語りの権威をメタフィクショナルな観点から再考し、著作権の不確かな当時の出版状況と呼応することを明らかにするものである。作品の効果と統一を重視する Poe の創作理念に反するような、*Pym* という作品の冗長さ、一貫性の欠如、不可解な結末は、本作品の価値を損なう欠点と見なされてきた。だからこそ、本作品の整合性を見出すことを意図したメタフィクショナルな解釈はすでに多くの論者によって提示されてきたが、その観点から浮かび上がる Poe の権威的作者像への懐疑、あるいは Poe に代わる権威の可能性については検討の余地がある。19 世紀文学市場における「再版」に注目し、“culture of reprinting”という概念を提唱した Meredith McGill は、当時の文学市場が海外の本や定期刊行物の再版に加えて、著作権のない新聞や雑誌などの無許可の出版物で溢れていたと指摘している。このような状況が作者の利益を保護する著作権法の整備を妨げる要因となったが、彼女は作者がテキストから切り離されたり再結合されたり、ヨーロッパの作品がアメリカの都合で再編成されたりする「システム」に価値を見出す。さらに、Ryan Cordell はアンテベラム期の新聞や雑誌におけるテキストの構成と流通は、個人的というよりも共同的な、中心的ではなく分散的な authorship のモデルを提供していると論じ、“network authorship”という概念を提案している。これらの議論を踏まえると、*Pym* という作品の混沌はまさに当時の出版状況を再現しているかのように思われる。というのも、本作品は航海に関するさまざまな知識の援用と Poe の虚言が入り交じり、他作品の剽窃も指摘されている。さらに、雑誌掲載を前提とした上で書かれ、実際には大部分を書き下ろした形で出版されたという背景から、雑誌という共同かつ分散的な authorship に組み込まれた上で、Poe の名で出版されるという、個人的かつ中心的な authorship を示している、折衷的背景を持った作品であるといえる。このように、市場と不可分な経緯をもって書かれた *Pym* には、著作権の法的整備を求めていく作者を筆頭として中央集権化していく力学、そして McGill や Cordell の指摘するような、作者のみに還元することはできない複雑で共同的な authorship の構造的力学の二つが認められると考えられる。この仮定に基づいて、本研究では *Pym* のもつ歪さを文学市場との呼応の中で読み解き、Poe の演出する「権威的作者像」とは異なる作者像を提示することを目的とする。以下、具体的な分析の概要をまとめる。

## (1) 中心的権威の排除

*Pym* という作品は、冒頭から誰が物語を語るのかという問題が提起されている。1837 年、*Southern Literary Messenger* の 1 月号 2 月号の二回に渡り掲載されたこの作品は、翌年の 7 月に Harper and Brothers から出版された。出版の際に加筆された Preface では、物語の主人公であり冒険の経験者である Pym が、Mr. Poe の名の下で雑誌掲載された経緯について語るという体裁を取っている。Pym の経験した希有な冒険をフィクションという形で発表したらどうかと提案した Mr. Poe に、Pym は Mr. Poe が代筆して発表することを承諾し、雑誌掲載文は Mr. Poe が、それ以後は Pym 本人が物語を書いたのだと述べている。つまり、この物語は最初から共同的な authorship が提示され、特定の作者という中心的権威が揺らいでいるのである。このような中心性の欠如は物語構造にも反映している。*Pym* には脈絡なく挿入される「メインストーリーからの逸脱」が 5 つある。いずれも航海を経験したことのない読者のために、Pym が必要な説明を加えるという体で挿入されるが、その内容は Poe の虚言であることが指摘されている。まさに、「再版」システム下では必ずしもソースを特定できないからこそ、Poe のほら話もまた真実らしさを帯びるのである。James Hutchisson は船にかかわる最初の逸脱「積荷の方法」に注目し、Poe の創作論として解釈することができると指摘する。この逸脱では、積荷が動かないように固定することの重要性が説かれ、*Grampus* 号の積荷がいい加減であるのはバーナード船長の仕事の恥ずべき所業であると Pym は糾弾している。Hutchisson は、この箇所の「積荷」を作品の構成要素と読み替え、作品内の出来事が有機的に繋がり結末へと至るべきであるという Poe の創作論と呼応すると主張するのである。彼の指摘のように、積荷を作品の構成要素と捉えるならば、船そのものは作品に該当すると考えられる。さらに、積荷を配置する責任を負う船長は作品を構成する作者となり、Barnard 船長は比喩的な作者ということになる。この関係性を踏まえると、*Pym* という作品は Poe の創作論として解釈することが可能であり、積荷を非難される船長は作者としての力不足を Pym に糾弾されているのである。さらに、Pym がこっそりと *Grampus* 号へ乗船するために、積荷を動かして船倉に隠れ場を作る友人 Augustus は、父親であり船長である Barnard の権威を侵害しているといえる。船長という中心的権威であった Barnard は、はじめから絶対的な権力者としては提示されておらず、出港後に起きた船員たちの反乱によって船から流され、物語からも退場してしまう。続いて船上の権力者となった反乱者たちの中心人物である船員もまた、Pym たちが船を取り戻す際にあっさり死んでしまう。このように、*Grampus* 号における中心的権威は早急に排除されるような原理が働いているのである。船を奪還してすぐ嵐に巻き込まれたことで、ほとんどの船員たちが放り出され、Pym、Augustus、反乱側から仲間となった Peters、そして反乱者のひとりである Parker だけが生き残り、今度はこの 4 人のうちの誰が中心的権威を獲得するのかを争うこととなる。

## 研究成果の概要 (つづき)

## (2) Pym の中心化

船を支配し行き先を決める人物が、作品を所有しプロットを決定する作者の比喻と見なし得ることから、誰が物語を語るのかという問題が Pym の冒険物語においても主軸となっていることがわかる。生き残った Pym たち 4 人は、作者の座をめぐる対立するのである。一方で、この冒険から生きて戻り、語り手として物語を綴っている Pym の存在を踏まえると、物語内で Pym が中心的権威を獲得していくことは必然である。したがって、中心的権威が排除されていくと同時に、Pym だけは着実に中心化していくという原理が働くため、いかに Pym が中心化していくかが問題となる。Pym は語り手でありながらも、一貫して特権的な立場に置かれているわけではなく、物語序盤では受動的なキャラクターとして描かれている。Pym の航海への興味を煽り、家族や船長の目を盗んで *Grampus* 号に乗り込む手はずを整え、食事の世話をするのは Augustus であり、従順な Pym はむしろ、彼の話に影響される聞き手としての側面が強調されている。語り手として事後的に物語を綴る Pym の次元が存在する傍ら、物語内の次元で Pym は「聞き手／読み手」の立場を抜け出し、「語り手／書き手」の立場を得る必要がある。Augustus との従属関係が変化するのは、船上で反乱が起こり、捕らえられた Augustus がなんとか状況を知らせようと Pym に手紙を届ける場面である。Augustus は、Pym に内緒で船に連れてきた Pym の飼い犬 Tiger に手紙をくくり、Pym の元へと届けさせる。船上の状況がわからない Pym は、彼からの食糧供給が途絶え、餓死しかけながらも Tiger の首元にくぐられた手紙を見つける。しかし、十分な光のない状況で手紙を開いた Pym は、白紙であると勘違いをして破り捨ててしまう。すぐに裏面を確認しなかったと気づき、破片を集めて再度解読を試みるが、断片的にしか文章を読み取ることができず、船上の危機的状況が Pym に伝わることはない。Ki Yoon Jang が指摘するように、この場面は Pym の「聞き手／読み手」の立場の拒絶として解釈することができる。Pym の「誤読」は書き手としての Augustus の信頼を揺るがしているのである。さらに、Pym の主体化は *Grampus* 号を奪還した後により顕著となる。反乱者たちから船を奪還し、嵐に巻き込まれた 4 人の中で、最も身体的に健康なのは Pym である。次いで正気を保っている人物として言及されるのが Parker であり、飢餓のためくじ引きで当たった人物を他の 3 人が食べるという提案をして、Pym の反対を押し切り Augustus と Peters の同意を得るが、Parker 本人がくじに当たって死ぬこととなる。彼は他者を説得する「言葉の力」をもつため、Pym の中心化を脅かす人物として排除されるのである。さらに、Pym を従属させる存在であった Augustus もまた、船奪還の際の右腕の怪我が壊疽を引き起こし死んでしまう。このように、Pym の中心化を妨げる存在は *Grampus* 号を舞台とした物語で排除され、Pym は船の中心的存在＝プロットを決定する語り手の座を獲得するのである。

## (3) 権威的な語り手 Pym の排除

新たな船 *Jane Guy* 号に拾われた Pym と Peters は南極を目指すこととなる。Pym は Guy 船長という新たな権威に直面するが、出会ってすぐに Guy 船長の資質を疑問視し、Guy もまた Pym の判断に従って船の行き先を決めるようになったと述べている。つまり、Pym の獲得した語り手という特権は安定しているといえる。しかし、船がツァラル島と呼ばれる文化・言語の異なる島に辿り着くと、誰の言葉が最も力を持っているかという観点から権威を得ていた Pym の優位性は揺るがされる。言語を共有しないからこそ、語り手の座を奪い合うという対立も生じない代わりに、語り手であることもまた優位にはならないのである。友好的にみえたツァラル島の住人が船員たちを虐殺すると、Pym と Peters はなんとか脱出しようと試みて、船をこいで真っ白な瀑布に吸い込まれていく場面で物語は終わる。この不可解な結末の後、末尾におかれた Note では名前を持たない新たな語り手が登場し、Pym が結末まで書き終える前に急死したと説明する。このような早急な死と物語からの排除は、ここまで中心的権威を獲得した人物に為されてきたことに相違ない。結局のところ、Pym もまた中心的権威、つまり物語の「語り手／書き手」という座を手に入れると同時に排除されていく運命にある。文学市場において、作者の個人的な権威が解体されていく原理に従って、Pym もまた最後まで唯一の語り手ではあり得ない。匿名の語り手は、Pym の描いてきた物語への解釈を Note で披露しており、Pym が Augustus にしたように、作者としての Pym への信頼に疑問を呈している。Poe は Note で Pym の排除を示すことで、作者でも自身の作品を特権的に所有することは不可能であることを示し、自ら「権威的作者像」とは異なる共同的な作者性を寓意的に描いている。Poe は語りの所有を問う Pym という物語を通して、流動的な所有の在り方を提示している。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 該当なし。

② 該当なし。

③ 該当なし。

④ 学会発表

有馬三冬「語りの権威と流動性—*Arthur Gordon Pym*における作者性と19世紀の著作権」、第60回日本アメリカ文学会全国大会、2021年10月2日開催(オンライン)。